— 観 察 記 録 —

熊本県玉名市におけるイエスズメ *Passer domesticus* 雌雄の九州初記録

池長裕史^{1,*}・満田 實²・秦野英徳³

¹ 〒 839-1213 福岡県久留米市田主丸町益生田 594-11

² 〒 865-0072 熊本県玉名市横島町横島 4333

³ 〒 870-1150 大分県大分市小野鶴南 2 丁目 5-2

(2018 年 7 月 27 日受付；2019 年 9 月 29 日受理)

キーワード：イエスズメ, *Passer domesticus*, 雌雄, 玉名市, 熊本県, 九州初記録.

日本鳥学会誌

Japanese Journal of
Ornithology

© The Ornithological Society
of Japan 2020

Hiroshi IKENAGA^{1,*}, Minoru MITSUTA², Hidenori HATANO³. Male and female House Sparrow *Passer domesticus*, on Tamana-shi, Kumamoto Prefecture — the first record for Kyushu, Japan. Jpn J Ornithol 69: 97–103. (2020)

Key words: House Sparrow, *Passer domesticus*, Male and female, Tamana-shi, Kumamoto Prefecture, First record for Kyushu.

¹ 594-11 Masuoda, Tanushimaru-machi, Kurume-shi, Fukuoka 839-1213, Japan.

² 4333 Yokoshima, Yokoshima-machi, Tamana-shi, Kumamoto 865-0072, Japan.

³ 5-2 Onozuruminami-2chome, Oita-shi, Oita 870-1150, Japan.

1. 種名：イエスズメ *Passer domesticus* 3羽
(羽数について、詳細は「13. その他」に記述)。

2. 観察者名：真木広造, 満田 實, 秦野英徳,
池長裕史ほか。

3. 観察日時・場所：2018年2月4日–4月20
日, 熊本県玉名市滑石干拓の耕作地 (32°53'N
130°30'E 付近)

4. 観察距離：数 m の距離から 8 倍の双眼鏡で
観察し、望遠レンズを装着したデジタル一眼レフ
カメラで撮影した。

5. 観察した環境：玉名市滑石干拓は熊本県北
西部に位置し、菊池川河口部と境川に挟まれて有
明海に面している。当該個体を観察した場所は、
明治期に干拓された「共和開」と呼ばれる 116.5
ha の地域 (玉名市教育委員会 2011) である、人
家は共和開の北側に集中しており、南側の一帯は
主に農耕地で、そこには南南西方向の農道と方格
に区画された水田や蓮田が広がり、小規模な野菜

畑と耕作放棄地も散在していた。また、干拓地の
南西端には佃煮工場や漁協の施設があった。当該
個体が最初に観察された場所は農耕地の南西部に
位置していた管理されないままのビワ *Eriobotrya*
japonica の植栽に草本類が生い茂った藪のよう
な畑地であった。観察時には付近の水田は乾い
ており、当該 3 羽はその畑地から 250 m ほど離
れた、背の高い草本類 (セイタカアワダチソウ
Solidago canadensis, ヨシ *Phragmites australis*, ヨ
モギ *Artemisia indica* など) が野焼きされた耕作放
棄地でもしばしば観察され、同所ではカワラヒワ
Chloris sinica, スズメ *P. montanus*, タヒバリ *Anthus*
rubescens, ムネアカタヒバリ *A. cervinus*, ヒバリ
Alauda arvensis, ムクドリ *Spodiopsar cineraceus*,
ツグミ *Turdus naumanni* なども観察された。

6. 形態に関する記述：観察した 3 羽は、いず
れも体型はスズメと同様で、頭が丸く体に対して
やや大きく見え、体もやや小太りであった。体サ
イズは同所で観察されたヒバリ (17 cm) よりも小
さく、スズメ (14–15 cm) やカワラヒワ (14.5–16
cm) と同大か、やや大きい程度であった (括弧内

* E-mail: MXC02334@nifty.com

doi:10.3838/jjo.69.97

は真木ら (2014) に記載のある全長を示す)。3羽の羽色は個体によって異なった。そのうち2羽は共通の形態的特徴が見受けられ (これをタイプ A とする)、各部位の羽色は次の点でスズメと類似していた。嘴基部から眼の周りは黒色で、眼の後ろから後頸側面は栗色。肩羽と背は、各羽に黒色の太い軸斑があり、羽縁は茶褐色で、羽の重なりから茶色と黒の縞模様を呈していた。風切羽は暗褐色で、初列風切と次列風切には褐色の細い羽縁があり、三列風切には同色のやや幅広い羽縁が見られた。大雨覆の羽毛の重なった内側は黒褐色であったが外側の羽縁が幅広く褐色であったために全体として赤褐色から栗色に見えた。中雨覆は白く見え、その上に栗色の小雨覆が重なって白い翼帯を形成していた。脇から腹は淡灰白色であった。スズメとの違いは、額から後頸にかけて灰色で、頬には黒斑がなく淡灰白色、喉から胸にかけて黒色部があったことであり、胸の黒斑はうろこ状に広がっていた。また、腰から上尾筒も灰色であった。また嘴はスズメよりもやや太めで、暗黄色を呈していた。脚は肉色であった。眼の後ろにごく小さな白斑が見られたが、2羽間で、その大きさがやや異なり、個体判別が可能であった (図 1-3)。また、「9. 観察した行動」で示した継続的な観察から、このタイプの個体の羽衣は、見つかった当初とそれ以降で変化した。具体的には、胸のうろこ状の黒斑が2月に比べて3月以降にはより広がっていたが、これは胸の黒い羽の羽縁の白い部分が徐々に欠落し露出している黒色の羽が相対的に増えたことによる。全体的な色合いや濃さは、光線の変化もあり判然としなかったが、特段の変化は認められなかった。3羽のうちの別の1羽 (タイプ B とする) は、上記のタイプ A より

も赤褐色味がなく淡色で、背から翼の縞模様は淡褐色と濃茶褐色からなっていた。脇は淡黄褐色を帯びた白色で体下面は灰白色であった。額から後頭は淡灰褐色で、乳白色の明瞭な眉斑があり、眼の後ろから頸にかけて淡褐色。眼先と頬から胸は灰白色であった。嘴はやや薄い暗黄色で脚は肉色であった (図 3, 4)。

7. 計測値：—

8. 種を同定した規準：今回観察された2タイプの個体について、体型が小太りで頭が相対的に大きく、太い嘴を持つという形態的特徴をもつ分類群としてアトリ科 *Fringillidae*、ハタオリドリ科 *Ploceidae*、カエデチョウ科 *Estrildidae*、テンニンチョウ科 *Viduidae* およびスズメ科 *Passeridae* を対象に Clement et al. (1993) および del Hoyo & Collar (2016) に基づき同定を試みた。このうち当該3羽のうちのタイプ A のように全体的にスズメに似ている種で、頬が白く、背から翼全体に茶褐色と黒色が縦縞状に混じり、頭頂部が灰色で、喉から胸に黒色部がある種はイエスズメの雄のみであった。このことからタイプ A の2羽をイエスズメの雄と判断した。一方、タイプ B のように淡褐色で眉斑が明瞭な鳥はハタオリドリ科やテンニンチョウ科のいくつかの種の雌にも見られたが、中雨覆の羽縁が明瞭に白く翼帯を形成している種はスズメ科スズメ属 *Passer* の雌に限られた。同属の種はアフリカからヨーロッパにかけて28種が分布しており、基本的に留鳥性が強い (del Hoyo & Collar 2016)。このことから、遠隔地に分布する日本未記録の種については検討から除外した。アジアまで分布しているスズメ属でタイプ B に近い種はイエスズメ、ニューナイスズメ *P. cinnamomeus* と日本未記録のセアカスズメ *P. flaveolus* およびノ

図 1. 玉名市滑石で観察されたイエスズメ雄個体、頭から背の模様がわかる。(2018年3月4日、撮影：池長裕史)
Fig. 1. The male House Sparrow observed on Nameishi, Tamana-shi, Kumamoto Prefecture on 4 March 2018, showing its head and back (photographed by H. Ikenaga).

図2. 玉名市滑石で観察されたイエスズメ雄個体，顔と胸の模様がわかる．（2018年3月7日，撮影：満田 實）
Fig. 2. The male House Sparrow observed on Nameishi, Tamana-shi, Kumamoto Prefecture on 7 March 2018, showing its face and breast (photographed by M. Mitsuta).

図3. 玉名市滑石で観察されたイエスズメ3個体，上から下に，雄，雌，雄．（2018年4月8日，撮影：満田 實）
Fig. 3. Three House Sparrows observed on Nameishi, Tamana-shi, Kumamoto Prefecture on 8 April 2018 (males at the top and bottom with the female between; photographed by M. Mitsuta).

図4. 玉名市滑石で観察されたイエスズメ雌個体．（2018年2月3日，撮影：秦野英徳）
Fig. 4. The female House Sparrow observed on Nameishi, Tamana-shi, Kumamoto Prefecture on 3 February 2018 (photographed by H. Hatano).

ウメンスズメ *P. ammodendri* の4種のみであった。日本未記録の2種はそれぞれ東南アジアと中央アジアに留鳥として分布しており，セアカスズメは背面が一様に淡褐色であること，ノウメンスズメ

は大雨覆の羽縁が白く2本の翼帯がみられることから，翼帯が1本のタイプBとは異なっていた。ニュウナイスズメの雌はスズメよりもやや小さく全長は14 cm程度とされ（真木ら2014），またや

や細い体型をしている。羽色については、ニュウナイスズメの方がイエスズメに比べて頭はより暗色で、オリーブ褐色が強く、クリーム白色の眉斑もより長く明瞭で、幅広いとされている (Clement et al. 1993)。また、ニュウナイスズメでは肩羽および小雨覆にはっきりした条斑はなくほぼ単色であり、中雨覆と大雨覆の羽縁の淡色斑が2本の翼帯をなしている (Clement et al. 1993)。本個体の体サイズは上述のとおりスズメやカワラヒワと同大かさらに大きかったことから、ニュウナイスズメより明らかに大きく、体型もがっしりしていた。羽色は全体として淡く、肩羽および小雨覆には黒斑が混ざり、中雨覆の羽縁による翼帯は明瞭であるが、それほど幅広くなく、大雨覆の羽縁は淡色ではあるが明瞭な翼帯とはなっていなかった。これらによって、本個体をイエスズメの雌と判断した。なお、日本鳥学会 (2012) にない和名は山階 (1986) に従った。また、ニュウナイスズメの学名は、日本鳥学会 (2012) では *P. rutilans* としているが、ここでは浅井ら (2016) の指摘によった。

9. 観察した行動：第2著者は当該個体の発見以来、ほぼ毎日干拓地での観察を続けた。当該3羽は、スズメやカワラヒワの小群と共に行動していることもあったが、基本的には3羽の独立集団として行動していた。発見された当初は最初に観察された草本類の藪の畑地と草本類が野焼きされた耕作放棄地との間を行き来しており、耕作放棄地の地面に降りて、焼けた灰の中から草本類の種子を食べていた。また、舗装された農道の路肩沿いの路面で落ちている小さな草本類の種子を食べていた。採餌後は藪に戻った。鳴き声はスズメと同様に「チャッ」や「チュン」と聞こえたが、スズメよりもやや大きく鋭い声のように感じた。2月中旬以降は干拓地内に野焼きされた耕作地が増え、当該3羽は干拓地の南側の野焼き跡耕作地や水路沿いの道路上などで観察され、また工場や漁協の施設付近でも観察された。4月8日の午後に、工場の施設付近で1羽のスズメが藪くずのようなものを啜って電柱の支線カバーの中から出てくる場面が観察された (徳淵義実 私信)。同日、スズメが入ったのと同じ支線カバーの穴にイエスズメと判断された雄雌の2羽も入っていく行動が観察され、雌が2羽の雄のうち特定の個体と行動を共にする傾向が見られたが、交尾などの繁殖を示唆する行動は観察されず、その後、周辺での営巣も確認されなかった。4月20日18時半頃 (日没約30分前) に、干拓地南側の施設付近の電線に止

まっていた3羽がそろって集落がある北東の方向へ飛んで行くのを観察して以降、確認できなくなった。

10. 写真：あり (図1-4)。

11. 死体・標本保管場所：—

12. 過去の記録とその文献：日本鳥学会 (2012) によれば、本種は北海道本土、利尻島、天売島、舳倉島および見島において記録されている。日本におけるこれまでの記録を表1に整理した。利尻島では1990年から1992年まで周年、島内の複数地点で複数個体が継続的に観察されたが (小杉1991; 佐野1992a, 1992b, 1995)、その後は確実な記録はない (佐藤2007; 小杉和樹, 佐藤雅彦 私信)。このほかに、佐野 (1995) は礼文島、および秋田県八森町 (現八峰町) からの観察を報告しているが、写真等の証拠はなく詳細は示されていない。また、北海道本土では積丹町において1992年から1997年に雄1羽または2羽が継続して観察され、さらにこれとは別に1999年にも一時的に雄1羽が観察されている (佐藤領江子 私信)。山口県見島での記録以降では、いずれも沖縄県八重山諸島において、2016年10月に与那国島で雌1羽 (松尾 亮, 鈴木由清 私信)、2017年11月に石垣島で雌1羽 (片岡宣彦 私信)、2018年4月に石垣島で雄1羽 (奥間邑明 私信) が観察されている。

13. その他：今回の熊本での発見時 (2月1日) にはイエスズメと判断される雄3羽と雌2羽が観察されていたが (真木広造 私信)、著者らは2月4日以降に3羽のみを観察した。

14. 考察：本種はユーラシア大陸中西部と、人為的に導入された南北アメリカ、オーストラリア、アフリカ南部等に広く繁殖分布し、世界的に最もよく知られている種のひとつである (Clement et al. 1993)。人為的に導入された地域からの分布域の拡大も含め、日本への進出の可能性が考えられている種であり (佐野1990, 2005; 松岡1995)、当該3羽の渡来の由来を考察することは重要である。

本種は基本的に留鳥性が高いとされ、トルクメニスタン西部、イラン北東部、カザフスタン南部から中国北西部、パキスタン北西部で繁殖する亜種 *bactrianus*、およびカシミール東部からシッキムで繁殖する亜種 *parkini* だけが渡りをするとして (Clement et al. 1993; del Hoyo & Collar 2016)、中国では内モンゴルに基亜種が繁殖分布しているが中国中央部には分布していない (MacKinnon & Phillipps 2000)。極東アジアにおいては、ロシアではカムチャツカまで人為的に導入されているが

表 1. 日本におけるイエスズメ *Passer domesticus* の観察記録一覧
 Table 1. Previous records of House Sparrow *Passer domesticus* in Japan.

記録 No.	記録年月日	都道 府県	地名等	年齢等	性	個体数	観察者名	状況	出典等	備考
1	1990 年 8 月 4 日	北海道	利尻島 (利尻富士町鷺泊)	成鳥	オス	1	佐野昌男	観察・撮影・写真掲載 (モノクロ 1 枚)	佐野 (1990)	日本初記録
2	1990 年 8 月 4-7 日	北海道	利尻島 (利尻富士町鷺泊)	若鳥*	メス	2	佐野昌男	観察・撮影・写真掲載 (モノクロ 1 枚)	佐野 (1990)	若鳥について佐野 (1990) は同島内で繁殖した可能性を述べているが、藤岡 (1992) はこの個体についてはイエスズメとは認めがたいとし、繁殖について論ずるのは慎重であるべきとコメントしている。
3	1990 年 11 月 24 日-1991 年 1 月 15 日	北海道	利尻島 (利尻富士町鷺泊)	成鳥	オス	1	小杉和樹	観察	佐野 (1992a, 1992b), 小杉和樹 (私信)	同地で継続的に観察されているとしている
4	1991 年 8-11 月	北海道	利尻島 (利尻富士町鬼脇)	成鳥と若鳥*	オス	2+3	村上将示郎	観察	佐野 (1992a, 1992b, 1995)	繁殖を伴った分布拡張があるとしている
5	1991 年 10 月 31 日-12 月 31 日	北海道	利尻島 (利尻富士町鷺泊)	成鳥と若鳥*	オス	3+2	小杉和樹, 佐藤雅彦	観察	佐野 (1992a, 1992b), 小杉和樹, 佐藤雅彦 (私信)	スズメの群れの中で観察された
6	1992 年 4 月 1 日-1997 年 7 月	北海道	積丹町来岸	成鳥と若鳥*	オス	2	佐藤領江子	観察・撮影	日本野鳥の会野鳥記録委員会 (1992), 佐野 (1992a, 1992b, 1995, 2005)	このオス個体は頬に黒斑が見られ、スズメとの交雑個体の可能性が示唆されている。また、同個体は、その後スズメと交雑を繰り返したとされ、1997 年 7 月まで観察されている (佐藤領江子 私信)。
7	1992 年 5 月 2-6 日	北海道	利尻島 (利尻富士町鷺泊)	成鳥	オス	5+	佐野昌男	観察	佐野 (1992a, 1992b, 1995)	繁殖の可能性とともにスズメとの交雑の可能性を示唆している
8	1992 年 4 月 22 日, 5 月 2-4 日	北海道	利尻島 (利尻富士町鬼脇)	成鳥	オス	3	佐野昌男, 村上将示郎	観察	佐野 (1992a, 1992b)	
9	1992 年 6 月 24 日	北海道	利尻島 (利尻富士町鬼脇)	幼鳥	-	-	村上将示郎	観察・撮影	佐野 (1992a)	巣立ち幼鳥が親から給餌を受けていたとしている
10	1992 年 7 月 30 日	北海道	利尻島 (利尻町杵形)	成鳥	オス	1	佐野昌男, 市川武彦	観察	佐野 (1992b, 1995)	
11	1992 年 7 月 30 日	北海道	利尻島 (利尻富士町鷺泊)	成鳥	オス	1	佐野昌男	観察	佐野 (1992b)	
12	1992 年 7 月 30 日	北海道	利尻島 (利尻富士町鬼脇)	若鳥*	メス	1	佐野昌男	観察	佐野 (1992b)	
13	1992 年 8 月 1 日	北海道	礼文島 (礼文町香深)	若鳥*	メス	1	佐野昌男	観察	佐野 (1992b, 1995)	
14	1992 年 8 月 1 日	北海道	礼文島 (礼文町船泊)	若鳥*	メス	3	佐野昌男	観察	佐野 (1992b, 1995)	
15	1994 年 5 月 22 日-27 日	石川県	舳倉島 (輪島市海士町)	-	メス	1	真木広造, 橋映州, 新井清雄, 渡部良樹ほか	観察・撮影	バーダー編集部 (1995), 日本野鳥の会石川支部 (1998), 橋 (1999), 渡部良樹 (私信)	
16	1994 年 8 月	秋田県	八森町 (現八峰町)	-	メス	1	佐野昌男	観察	佐野 (1995)	
17	1998 年 5 月 3 日	北海道	天売島東部 (羽幌町天売字和浦)	-	メス	1	福田佳弘ほか	標識捕獲	福田ら (2001)	
18	1999 年 5 月 25 日-6 月 1 日	北海道	積丹町来岸	成鳥	オス	1	佐藤領江子	観察・撮影	佐藤領江子 (私信)	
19	2008 年 4 月 29 日-5 月 4 日	山口県	見島 (萩市見島本村)	成鳥	オス	1	秦野英徳ほか	観察・撮影	見島観光協会バードウォッチング係 (2008)	
20	2016 年 10 月 11 日	沖縄県	与那国島 (八重山郡与那国町)	-	メス	1	松尾亮, 鈴木由清	観察・撮影	松尾 亮, 鈴木由清 (私信)	
21	2017 年 11 月 3 日	沖縄県	石垣島 (石垣市新川)	成鳥	メス	1	片岡宣彦	観察・撮影	片岡宣彦 (私信)	幼鳥と区別できない
22	2018 年 2 月 1 日-4 月 20 日	熊本県	玉名市滑石	成鳥	オス, メス	最大 5 羽	真木広造, 満田實, 秦野英徳, 池長裕史ほか	観察・撮影	本記録 (3 羽), 真木広造 (5 羽の私信)	
23	2018 年 4 月 19 日	沖縄県	石垣島 (石垣市川平)	成鳥	オス	1	奥間邑明	観察・撮影	奥間邑明 (私信)	

*佐野氏による「若鳥」の記述について、記録 4 と 5 ではオスと、記録 2 および 12-14 ではメスと記述されているが、本種の幼羽の性判定は困難と思われる (Clement et al. 1993)。

(Lobcov 2002, 2010), サハリン南部までは分布を広げていない (石城 1992). また, 韓国においては迷鳥とされ, 2002 年 10 月, 2006 年 5 月 18 日および 2010 年 5 月 20 日の記録があるに過ぎず, 亜種は「*indicus group*」と記述されているが (Birds Korea 2012, 2013), その同定根拠, 具体的な亜種名は示されていない. 亜種 *indicus* を含む亜種グループは *Oriental group* と呼ばれ (Clement et al. 1993), 英名を *Indian Sparrow* として分割されることがある (del Hoyo & Collar 2016). 形態的に基亜種よりやや小さく, 頬の色がより白いとされる. これまで日本で記録されているイエスズメの亜種は基亜種とされ (日本鳥学会 2012), 日本で記録された個体は沿海地方からの飛来が示唆されているが (佐野 2005), その来歴が自然分布によるものか, 人為導入個体群の分布拡大によるものか定かではない. 本報告における 3 羽について, 著者らはその亜種を特定することはできなかった. 今後の亜種についてのさらなる検討が望まれる.

本種の日本での繁殖については, 利尻島での 1990 年の最初の発見当時にすでに繁殖していたとの見解 (佐野 1990) に対して異議が出され, 議論された経緯がある (藤岡 1992; 佐野 1992a; 上田 1993). その後, 利尻島と積丹町における本種の雄個体の周年滞在と, その間に本種とスズメとの交雑の可能性は報告されたものの (佐野 1995, 2005), 本種の繁殖や分布の拡大についてはこれまで確認されていない (泉 2005; Summers-Smith & Taguchi 2010). 一方, 舳倉島と見島での事例は, それぞれ雌と雄の単独個体の飛来であったが, いずれも個体として定着には至らず数日でいなくなったとされている (渡部良樹 私信; 秦野英徳私信). また, 与那国島と石垣島での記録についても, その前後の情報はなく短期間の渡来であったと考えられる.

今回玉名市で観察された 3 羽が同地にいつから渡来していたのかは定かではないが, 雌雄両性が同時に長期間確認された確実な事例となる点で国内における貴重な記録である.

特定の雌雄個体が同時に支線カバーの穴に出入りしていた行動は, 巣穴を探す繁殖行動の一部とも考えられるが, 当地で実際に繁殖していたかどうかは不明である. 本報告は九州初記録であると考えられる.

本稿を取りまとめるにあたり, 国内のイエスズメの記録の情報収集に協力していただいた樋口孝城, 片岡宣

彦, 小杉和樹, 真木広造, 松尾 亮, 西村雄二, 小田谷嘉弥, 奥間昌明, 佐野昌男, 佐藤雅彦, 佐藤領江子, 鈴木由清, 田口文男, 高原健二, 徳淵義実, 梅本賢俊, 渡部良樹の各氏ならびに丁寧な指摘をいただいた 2 名の査読者と日本鳥学会和文誌編集委員に深く感謝の意を表する.

引用文献

- 浅井芝樹・岩見恭子・斉藤安行・亀谷辰朗 (2016) スズメ目 15 科を対象とした日本鳥類目録改訂第 7 版の学名と分類の検証—第 6 版および IOC リストとの相違—. 日鳥学誌 65: 105–128.
- バーダー編集部 (1995) 写真集 日本の鳥 1994. 文一総合出版, 東京.
- Birds Korea (2012) The Birds Korea Bird Review 2006. (オンライン) <http://www.birdskorea.org/Birds/Birdnews/Downloads/Birds-Korea-Bird-Review-2006.pdf>, 参照 2018-06-26.
- Birds Korea (2013) The Birds Korea Bird Review 2010. (オンライン) <http://www.birdskorea.org/Birds/Birdnews/Downloads/Birds-Korea-Bird-Review-2010.pdf>, 参照 2018-06-26.
- Clement P, Harris A & Davis J (1993) *Finches & Sparrows: an Identification Guide*. Princeton University Press, Princeton.
- del Hoyo J & Collar NJ (2016) *HBW and BirdLife International Illustrated Checklist of the Birds of the World. Vol. 2: Passerines*. Lynx Edicions, Barcelona.
- 藤岡正博 (1992) 佐野昌男氏による「北海道利尻島におけるイエスズメの生息確認」は, 雄 1 羽の渡来記録である. 日鳥学誌 40: 112–113.
- 福田佳弘・小高信彦・高田由紀子・山本泰志・内藤初夏 (2001) イエスズメの日本初標識記録. 山階鳥研報 33: 51–53.
- 石城謙吉 (1992) ハバロフスク市と南サハリン諸都市におけるイエスズメ *Passer domesticus* とスズメ *P. montanus* の分布状況. 北海道大学農学部演習林研究報告 49: 363–374.
- 泉 洋江 (2005) 生態図鑑 スズメ. Bird Research News 2 (4): 4–5.
- 小杉和樹 (1991) イエスズメは利尻島に勢力を拡大したのか? 利尻島自然科学会 NEWS (9): 2.
- Lobcov EG (2002) The making and dynamics of the introduced tree sparrow *Passer montanus* and house sparrow *Passer domesticus* populations in Kamchatka region. The biology and conservation of the birds of Kamchatka 4: 93–99. (ロブコフ EG, 藤巻裕蔵 (訳) (2014) カムチャツカにおける導入されたスズメとイエスズメの個体群の形成と動態. 極東の鳥類 (31): 90–98.).
- Lobcov EG (2010) The new materials for the distribution of house *Passer domesticus* and tree *Passer montanus* sparrows in the northern Kamchatka region. The biology and conservation of the birds of Kamchatka 9: 70–73. (ロブコフ EG, 藤巻裕蔵 (訳) (2014) カムチャツカ北部におけるイエスズメとスズメの分布に関する新資料. 極東の鳥類 (31): 98–102.).
- MacKinnon J & Phillipps K (2000) *A Field Guide to the Birds of China*. Oxford University Press, New York.

- 真木広造・大西敏一・五百澤日丸 (2014) 決定版日本の野鳥 650. 平凡社, 東京.
- 松岡 茂 (1995) 日本進出をはかる外国産鳥類. 農林水産技術研究ジャーナル 18: 16–21.
- 見島観光協会バードウォッチング係 (編) (2008) 2008 年春 見島の鳥. 見島観光協会バードウォッチング係, 萩.
- 日本鳥学会 (2012) 日本鳥類目録改訂第 7 版. 日本鳥学会, 三田.
- 日本野鳥の会石川支部 (編) (1998) 石川県の鳥類. 石川県環境安全部自然保護課, 金沢.
- 日本野鳥の会野鳥記録委員会 (1992) 野鳥情報・観察記録 1991.8–1992.7. Strix 11: 377–382.
- 佐野昌男 (1990) 北海道利尻島におけるイエスズメの生息確認. 日鳥学誌 39: 33–35.
- 佐野昌男 (1992a) 藤岡正博氏による「北海道利尻島におけるイエスズメの生息確認」の反論に対する見解. 日鳥学誌 40: 113–114.
- 佐野昌男 (1992b) 北海道におけるイエスズメの分布拡張. 信州理科教育研究会 (編) 長野県と日本列島の自然の研究 3 利尻島・礼文島・天売島—山岳と水と生物: 62–76, 信州理科教育研究会, 長野.
- 佐野昌男 (1995) 日本のイエスズメ. Birder 9(9): 40–41.
- 佐野昌男 (2005) わたしのスズメ研究. さ・え・ら書房, 東京.
- 佐藤雅彦 (2007) 利尻を訪れた生き物たち—その栄光と挫折の断片—. 北方山草 24: 9–15.
- Summers-Smith JD & Taguchi F (2010) House Sparrows *Passer domesticus* in Japan. Bull BOC 130: 273–276.
- 橘 映州 (1999) 舢倉の鳥たち—能登半島沖 50 km—. 橋本確文堂企画出版室, 金沢.
- 玉名市教育委員会 (2011) 玉名市干拓関連施設調査報告書. 玉名市教育委員会, 玉名.
- 上田恵介 (1993) 論争は見苦しいか? 藤岡—佐野論争に思う. 鳥学ニュース (48): 3.
- 山階芳麿 (1986) 世界鳥類和名辞典. 大学書林, 東京.